

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ことばとあたま・体のリハ室（単位1）			
○保護者評価実施期間	2026年3月10日		～	2026年4月10日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	18名	(回答者数)	15名
○従業者評価実施期間	2026年3月10日		～	2026年4月10日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4名	(回答者数)	4名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年5月27日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的にやっている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	10年近い経験を持つ保育士や児童指導員、そして言語聴覚士（ST）、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）といった専門職が在籍している。多機能型の強みを活かした、長期的な視野に立った多角的な療育を提供できている。保護者様からも「専門的な療育や助言が受けられる」と評価を頂いている。	各スタッフの観察や気付き、知見を基にしたアセスメントを全職員で共有している。児童の特性や得意・不得意に応じた個別支援を実施している。日々のごまめな連絡により、保護者が常に安心感を持てる体制を維持している。	今後は、各スタッフの知見と外部研修や内部研修を通じて、さらに展開して、事業所全体の支援全体のボトムアップを図っていきたい。また、専門性を活かした保護者向けのミニ勉強会を開催し、家庭支援も充実させていきたい。
2	児童の特性や活動中の様子（得意・不得意）を観察、アセスメントし、その内容を保護者と共有できている点。発信と受信により保護者の安心感に繋がっている。	日々の療育終了後、職員で写真や動画を集約する。連絡ツールを通じて、その日のエピソードやフィードバックを伝えている。	情報共有の質をさらに上げるため、ICTツールの活用を検討している。連絡用フォーマット改定を行い、職員の事務負担を軽減しつつ、より良い連絡を実現していきたい。
3	2と同様に、児童の特性（得意・不得意）に合わせ、具体的支援を実践できている。その情報を保護者へ共有し、高い信頼と安心感を得ている。	小規模のスケールメリット活かし、気づいた変化やアセスメント結果を、保護者へごまめに連絡・共有している。	アセスメントの視点をさらに全スタッフで統一していきたい。事業所のツールを運用し、経験の浅いスタッフの観察眼をさらにスキルアップしていきたい。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域交流の少なさ	限られた人員配置のなか、日々の専門的療育や個別アセスメント、保護者連絡を最優先せざるを得ない。しかし、一方では地域社会や外部との接点を持つ時間的余裕が、不足している現状は否めないと思われる。	スタッフに負担のない範囲で、公園、図書館、公民館などの地域資源を積極的に活用した外出プログラムを組み合わせたい。まずは中安全に交通ルールや社会的ルール、公共の場でのルールの練習、迷子になった時の氏名や保護者の氏名を言えるようになる練習から着手する。
2	・地域交流、きょうだい支援、防災取り組みの共有という情報発信が不足気味であった。	限られたスタッフ配置のなか、専門療育や日々のごまめな連絡を優先しており、結果「地域交流」「きょうだい支援」「防災取り組みの共有」といった情報が不足していた。	避難訓練の実施状況や非常時マニュアルなどを保護者へ開示・共有していく。
3	情報の透明性と視野の拡大	事業所の外（地域）へのアプローチは不足していた可能性は否定できない。	日々の療育を最優先にしながら、スタッフの負担のない藩士で、地域活動にも取り込んでいきたい。